

北欧の心身相関の思想にふれる

スウェーデンの医療施設，ヴィダル クリニーケン

濱口 豊太 埼玉県立大学保健医療福祉学部作業療法学科准教授

2007 年晩秋、心身医学の師が内臓感覚の一般書¹⁾を著したのを参考に、私は高齢障害者や終末期患者のリハビリテーションに心身相関研究の知見を活かせないかとストックホルムの運河で思案していた。そして、患者が心と身体の調和や自然と人間の関わりを感じて癒されるという北欧の施設を訪れた。自らの命とそれを支える細胞や器官が不可逆的な病状を進むなか、人間の生活や心理はどう癒されるべきか、この施設がよい参考になるかもしれない。

■医療施設ヴィダルクリニーケン

1985 年、ストックホルムの中心から車で南におよそ 1 時間のところにヴィダルクリニーケン(Vidarkliniken)は設立された。ヴィダルとは北欧神話に登場する神で、悪神を革の長靴で蹴飛ばして人々を救ったという話で知られる。

このクリニックはオーストリアの哲学者ルドルフ・シュタイナー(1861-1925)の人智学(アントロポソフィ)を取り入れ²⁾、自然と心と体は一体であることを提唱し、医療や教育の現場で実践している。クリニックの周辺にはシュタイナーの思想が育んだ学校や農園なども点在していた。

■シュタイナーの思想

シュタイナーは、人間は五感のみでは事物を表面しか捉えることができず、五感を越えた、より高次の超感覚(霊的感覚)によって初めて事物の本質を把握することができるという思想を説き、これを医学に導いた。瞑想や思考の訓練などの修行法は著書に紹介されている³⁾。なお、シュ

タイナーは霊媒や降霊術等の科学的でないものは誤りであるとし、霊的な行事についても自然科学的な態度で探求するというのを最も重要視したとされる。

シュタイナーの芸術観念は建築、医学、農業、教育などに応用されている。ヴィダルクリニーケンの外観、内装、照明はその建築思想に基づいており、治療法として絵画、音楽、体操などさまざまな療法が取り入れられている。また、療養中の食事についても独自の農法によって栽培された穀物と野菜や果実が用いられる。その農法とは、有機農業のような物質的な次元だけでなく、地球とほかの天体の動きなど宇宙との関係に基づいた「農業歴」を参照し、種まきや収穫を行なうというもので、バイオダイナミック農法と呼ばれる⁴⁾。

■建築物にみる思想

シュタイナーは自分たちが建物の内部で行なう行為には、それにふさわしい建物の形が必要と考え、ゲーテアヌムと呼ばれる独特の形姿をもつ建物を設計した。同じ造形はこのクリニックにも継承されている(写真 1)。ほかにも、祈りを捧げるための部屋には大空を垣間見るための幾つかの窓と、空想を広げるように高くアーチを施した天井が作られている。建物の内部にいながら外部と一続きの世界であるような錯覚さえる(写真 2)。

クリニックの外壁は青空と雲と草原の色に応答するかのような桃色をしており、内壁や廊下にはさらに濃い桃色の大理石が使われ、窓からのわずかな採光と暖色系の間接照明で、次第に静かな気分誘われる。



写真 1 ヴィダルクリニーケンの玄関部にある建物の外観。室内で行なわれる行事や行為のために空間を設計しているため外観はユニークな造形となる。

廊下から階段を昇ると 2 階は木調の廊下と壁で、1 階とは雰囲気異なる。患者がここで過ごすだけで自らの体や心理と自然に向き合えるように配慮していると、担当の看護師は静かな口調で語った。

バルコニーにはふと腰掛けての休息を促すようにソファと小さなテーブルが佇み、中庭の芝の上には思い思いに時間を過ごすための数脚のリクライニングチェアがあって、一人の若者が朝の日光浴をしていた(写真 2)。

■がん患者のショートケア

人間の五感に刺激を与えながら癒すこのクリニックの入院ベッドは 52 床すべて個室であり、利用者にはがん患者が多い。がんに病悩する人たちが一時入院して癒されている。

ヴィダルクリニーケンの入院期間は 2 週間程度。長期に療養する患者はまれである。長期間の高い医療費を王国は保障していない。ここを利用する人たちは初発のがん治療を目的としておらず、多発や再発、病期が終末期に近づいた人たちで、ホスピスや緩和ケアを受けることを目的としている。患者はここに入院することで短期間でも心身を癒し、退院後の生活においても充実をみるという。ここには人間が自然と一体となり、患者の死生観を静かに支援する取り組みがあった。

●食事

抗がん剤の投与や疼痛緩和治療も



写真2 中庭。散策用の通路には香草が植えられ、一部はアロマオイルにも利用される。建物の屋根にせり上がって立つ窓ガラス部分が多目的室の壁に設置された宙空窓である。



写真3 音楽療法で用いられるオリジナルの弦楽器。指で弦を弾くとやや低めの金属音を発する。調律が合っているからか、ランダムにつま弾いても上手く楽器を弾いている気になる。



写真4 絵画療法の作品。左から順に入院当初から退院までの間に描かれた。具象から抽象へと描きながら、自然と調和する自己心理を認識していく様が伝わってくる。

行なわれているが、まず着目すべきは毎回の食事である。入院治療中はクリニック周辺にある農園でビオダイナミック農法により育てられた野菜や穀物を中心とした食事をとり、肉、魚は週に一度摂られるという。野菜は野菜であろうが、普遍的な宇宙や自然の摂理に基づいて栽培されたと聞くとたちまち暗示にかかったような気がする。

普段からファーストフードを消化させられている私の胃がここの食べ物を受け入れたらどうなるだろうか。野菜の細胞を取り込んで分子的に結合したら、自らの体と自然とが一体感をもつような不思議な気分にもなるかもしれない。患者は食した食物の分子が自分の細胞内で新たに、外部とのつながりをもって置き換わる様を想像し、心身の助けとしているのかもしれない。

●各種セラピー

心身に静かに語りかけるような支援が、園芸療法、音楽療法、陶芸療法、絵画療法、体操療法、アロマセラピー、折りの集会などで行なわれている。音楽療法では患者が自ら製作する木製の弦楽器、自然の石を叩いて鳴らす打楽器などがあり、これらを奏でて楽しむという(写真3)。

絵画療法の部屋には患者が画いた絵が飾られている。街角の店のウィンドウを眺めている親子の風景が、次第に人間と周辺環境との境が曖昧になり、やがて自然と一体化するかのようなイメージが描かれていた

(写真4)。

アロマセラピーもまた心身のリラクセスに用いられる。疼痛緩和治療の際や入浴、休息時や活動時など、それぞれの場面と心理状態にあわせて香りを選択し行なわれるという。アロマオイルは付近の農園で栽培された植物から抽出され精製されたもので、院内の売店でも購入できる。アロマセラピーの部屋には大きなバスタブと手足にだけ使用する桶があり、温浴とマッサージを受けながら嗅覚刺激によるリラクセーションが促される。

■買かれた思想に問う

この施設は北欧の福祉国家において、一つの思想を基盤に運営されている理想的なケア施設だ。しかし、スウェーデンで高齢者になれば年金保障は住宅手当を含めて月額約12万円。個人では家賃とミニмумアマウントという最低必要額を除いた額以上に医療費や福祉サービス対価の保証を受けることはできない。2007年の時点では月額上限およそ9000円である。ヴィダルクリニッケンでは1日で最低700クローネ、およそ8000円が滞在費として請求されるため、2日滞在するだけで月極の保証は尽き、自らの預貯金を使用することになる。

いかに福祉国家とはいえ、手厚いサービスを受けるにはそれなりの資金が要る。加えて、介護職員の量的不足は日本と同じかそれ以下の深刻

な状況があることは既に報告した⁵⁾。

心身と自然の関連を理論のみでなく実践して存在するこの施設に学ぶことは多かった。特に緩和ケアのために施されるサービスとしてシュタイナーの考えを現代にも具現化し継承している点は基底にある哲学が参考になったといえる。しかし、ここに優るとも劣らない施設は日本にもあるだろう。私が知らないだけだ。だから最後にヴィダルクリニッケンに問いかけたい。私たちの体を構成する物質と同じように、サービスと金銭も地域を問わず共通して私たちの日常を巡っているのかと。

●文献

- 1) 福土審：内臓感覚——脳と腸の不思議な関係、NHK ブックス、NHK 出版、2007。
- 2) Steiner R：人智学から見た家庭の医学、風濤社、2003。
- 3) Steiner R：いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか、筑摩書房、2001。
- 4) Steiner R：身体と心が求める栄養学、風濤社、2005。
- 5) 濱口豊太ほか：ストックホルムにおける高齢者の生活と介護——エーデル改革後の高齢者住宅を視察して、訪問看護と介護、13(1)、36-43、2008。

濱口豊太●はまぐちとよひろ

埼玉県立大学

〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮 820